「あさか山難波津」の沓冠歌をみちびく序：曾禰好忠集本文復原私按

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2017-10-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西, 耕生 メールアドレス: 所属: 愛媛大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-044

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	「あさか山難波津」の沓冠歌をみちびく 序 ： 曾禰好忠集本文復原私按
Author	西, 耕生
Citation	文学史研究. 50 巻, p.1-22.
Issue Date	2010-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

「あさか山難波津」の沓冠歌をみちびく序

――曾禰好忠集本文復原私按――

西　耕生

はじめに――本稿の概要

現在いわゆる流布本系本文に基づく読解が通例となっている好忠集において、「あさか山難波津」の沓冠歌をみちびく詞書も、やはり一読して解しづらい異本系本文ではなく流布本による解釈が受け容れられている。もっとも、はやく松田武夫博士が指摘せられたごとく、異本系を代表する宮内庁書陵部蔵伝冷泉為相筆写本には古体を伝えるとおぼしき節もうかがわれる。本稿では、平安時代における和歌の起源伝承の受容のありようを顧慮しながら、これまで文意の通じにくかったこの詞書にかんする復原試案を提示する。具体的には、

［イ］詞書全体は、古今和歌集仮名序にみえる和歌の起源伝承にかかわる文脈をなす。

［ロ］冒頭は、日本紀竟宴和歌からうかがえるような天地開闢伝承をふまえる。

［ハ］「あさか山」と「難波津」をつなぐ叙述は、万葉集巻第八に収める市原王の作歌を引きふまえる。

という三つの観点を導入して異本系本文の読解を試みるとともに、この文章を、沓冠歌をみちびく長歌仕立ての序として把握しようとする。

一、古今和歌集序の受容

十世紀初頭に編纂された古今和歌集の仮名序において「歌の父母」に擬せられる「難波津」と「あさか山」の二歌が、八世紀中頃のものと認められる木簡の表裏両面に記されていたことがあらたに確認された。(1) この、滋賀県甲賀市信楽町にある紫香楽宮の址とされる宮町遺跡から出土した木簡には、いずれも万葉仮名でそれぞれの歌の一部が記されているが、訓字を用いた万葉集とは異なり一字一音の書記様態をもつところから、万葉集の成立以前にこれら二歌が人口に膾炙していたことをうかがわせる第一級の原資料と考えられるという。(2)

平安時代に入ってからも、一方の「難波津」の歌が古今和歌六帖や和漢朗詠集に、もう一方の「あさか山」の歌が古今和歌六帖だけでなく説話を伴なって大和物語や今昔物語集などにそれぞれ収められるが、周知のごとく千穎集には次のような形で二歌にふれるところがある。

千穎集序

夫千穎集者、千穎家集、和歌而已、故為其名焉、姓別田、名千穎、字疇、筑州穂浪東県人也、是草茅之生、田夫之種矣、其父則柿本人丸之末葉、其母亦小野小町之苗裔也、大兄元輔真人之養子、小

妹重之朝臣之家室、山辺赤人親昵之朋友、志賀黒主膠室（ママ）之知音矣、天禄比生、年七八歳始習和歌、猶可植於躬恒之古曲、礼朝示仲道侵祚成、春朝編柳、嘯難波津之歌、秋暮集螢、詠浅鹿山之什、花時惜花、月夜憐月、歩砌朝々、飛花（於）鳥之言葉、臥席夜々、極於嘯咏之美談、方今宴会唱歌、号貫之霊、暗跡逃去、遊莚吟詠、号忠岑之属、閉口蟄居、況乎、華山僧正耳語不言、駿河前吏来面無音、猿丸大夫輙悦早死、曽祢良忠自羞長命、昔有八本之歌、悉味万人之口、今也、千穎之曲、速断九廻之腸、時雖歴二代、人不知千穎、是猶文王不知楚山之玉也、千穎優長、莫過於歌、春夏秋冬乗興杖酔、贈答和歌、自然滋衆紙筆所存、凡数百首、勒成四巻、三巻千穎和歌、其第四巻古賢遺風、于時永祚第二庚寅之歳、宮律黄鐘戊戌之日、千穎外戚甥春米一斛丸撰也

〔穂久邇文庫本千穎集（私家集大成・中古Ⅰ・108千穎）〕

漢文体の序によれば、この集は天禄年間（九七〇～九七三）に生まれた「別田千穎」と名のる人物の家集であり、この人は柿本人麻呂および小野小町の末裔を父母にもち、兄は清原元輔の養子、妹は源重之の家室となり、山辺赤人や大友黒主とは親友であったという。七、八歳から習い始めた和歌は凡河内躬恒の「古曲」にならったなどと述べながら、序の末尾には、永祚二年（九九〇）十一月廿七日、外戚の甥にあたる「春米一斛丸」という人物がこの集を撰したものだと締めくくっている。[3]

稲作農耕にかかわる語をちりばめた戯文と認められるところからおおよそ仮名仮託の集だと考えられているが、人麻呂・赤人をはじめ六歌仙等の歌人に言及する文脈において、傍線を施したごとく特に「難波津之歌」「浅鹿山之什」にふれる箇所に注目したい。文中に破線を施した箇所に「猿丸大夫輙悦早死、曽祢良忠自羞長命」と述べるところをも考え合わせると、好忠の生きた十世紀の頃、枕草子の章段や源氏物語などの一節を持ち出すまでもなく、古今和歌集序に代表されるような和歌の起源やその伝統にかんする内容が広く知られていたことが相察されるからである。[4] 古今和歌集という書物は、そこに収められた歌々のみならず撰集のことに携わった人々をはじめとして、当代においてすこぶる重要な文化伝統の規範なのであった。

二、異本好忠集の詞書

曾禰好忠の詠んだ「ももちのうた」の中には、「あさか山なにはつ」（伝為相筆本好忠集・五三〇番～五六〇番詞書）の二歌に用いられた歌詞を和歌の頭尾の一文字それぞれに据えながら三十一首に配した、いわゆる沓冠歌が収められている。好忠のこの詠作に触発されて、源順や恵慶法師がおなじ趣向をこらした百首のうちに「あさか山なにはつを、かみしもにをきて」（書陵部蔵本恵慶集・二四六～二七六詞書）詠じた歌々を遺していることも、周知のごとくである。通説によれば好忠集の伝本は一類本（流布本）と二類本（異本）の二系統に大別されるけれど、彼が詠んだ「あさか山なにはつ」の沓冠をみちびく詞書にも、両系統のあいだで大きな異同が見とめられる。いま、それぞれの系統を代表する伝本を底本とした活字テキストによって対観すれば、以下のごとくである。

【一類本（流布本）天理図書館蔵伝二条為氏筆本】

これは、この雨の下の、神代より人の心の浅き影さへしるき山

の井に、御かねことよせし難波津咲きてにほへる花と、多くの人の口のはにおぼゆることをしるしたるなるべし

〔和歌文学大系『中古歌仙集㈠』七五ページ〕

【二類本（異本）宮内庁書陵部蔵伝冷泉為相筆本】

これは、このあとこたちの、神代より人の心のあさか山かげさへしるき山の井の、とよさきのみ船をよせし難波津に、咲きてにほへる花なしに、多くの人の口のはにおぼめく事をしるすなるべし

〔日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』一〇四～五ページ〕

「この序文は、底本の本文の方が為相本よりも分かり易い。為相本は誤写であろう。」[5]などと評せられもするように、一見して流布本と比べ異本に意味の通りにくい箇所が存するところから、前者の本文に基づいて解釈することが通例となっている。[6]

もっとも、かつて松田武夫博士が好忠集の校注本文を提供するにあたりその底本としていわゆる異本系を代表する伝為相筆本を選定した理由について、以下の三点を示しておられる。

一、流布本は容易に手にし得られるが、異本は活版印行されているものが皆無であること

二、異本の本文は、平安時代さながらの好忠の歌の古体を伝えているように思われる節があること

三、好忠集の流布本・異本を通じ、鎌倉期書写の現存古鈔本は僅か二本に過ぎず、両者の一つ為相本を活字により復製（ママ）する必要のあること

〔「底本の選定と校注の方針について」（日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』岩波書店、一九六四年九月、四二ページ）〕

とりわけ「古体を伝えているように思われる節がある」と慎重に明記せられた第二項は、「異本の本文は素朴な性質を有するため、解釈上しばしば困難に逢着した」（同書、四二ページ）という実感と合わせ、きわめて示唆に富む。廉価で身近に接することのできる影印テキストや重要な古写本の複製も刊行されている現在、第一項ならびに第三項に示されたような状況を脱して、好忠集を読解するための基礎資料はおおよそ整備されていると評してよいのであろう。[7]

本稿は、このような現状に支えられながら、曾丹の「あさか山なにはつ」の沓冠歌をみちびく詞書について解釈を試みるものである。

三、五音句七音句を基調とする構成

あらたまの　年のみそちに　余るまで
春は散りかふ　花を惜しみかね
秋は落つる　木の葉に心をたぐへ
夏は上紐　さゝで風にむかひ
冬はさびしき　宿にむれゐて
荒れたる宿の　過ぎゆく駒を　かぞへつゝ
明けては暮るゝ　月日をのみも　すぐすかな

〔……中略……〕

雲に鳴く鶴も　その声遂にかなしびにむせび
心のゆくゑは　へだてなしと思なせば
難波なる　あしきもよきも　同じ事
（すくもすかぬも　こと）ならず　名を好忠と　つけしかど
いづこぞわが身　人に異なる　とぞや

〔宮内庁書陵部蔵伝冷泉為相筆本好忠集・三六九～四六九詞書
（丸括弧内は諸本による校訂箇所。表記・改行等私意。）〕

異本好忠集に収めるいわゆる百首歌の序である。後半の箇所には、丸括弧内に示したように諸本との校合をとおして、先学も指摘するごとく目移りによる本文の脱落を補う必要も認められるが、全体として対句を構成しながら、冒頭および末尾の一節をとくに「あらたまの」および「難波なる」という枕詞で始めて、首尾に配された段落それぞれの叙述をゆるやかな七五調に形づくってあることに気づかされる。

「あさか山なにはつ」の沓冠の詞書を解釈しようとする際にもあらためてこうした点を意識して臨むなら、実際、異本系本文のほうに五音句七音句の基調が見出されるように思われる。

これはこの　あとこたちの　神代より　人の心の　あさか山　影さへしるき　山の井の　とよさきの　み船を寄せし　難波津に咲きて匂へる　花無しに　多くの人の　口の端に　おぼめく事を記すなるべし

傍線を施した「あとこたちの」および「とよさきの」の二箇所は意味不明であり、文脈の続きづらい箇所も認められるけれど、これら以外はすべて五音あるいは七音のまとまりを形成して、文意も明瞭となる前提が得られるように思う。傍線を施した二箇所も、こうした前提のもとで解読しうる端緒が得られるのではあるまいか。

これはこの　雨の下の　神代より　人の心の　浅き影　さへしるき　山の井に　みかねこと　寄せし難波津　咲きて匂へる花と多くの人の　口の端に　おぼゆることを　記したるなるべし

それに対して流布本系の場合には、破線を施した、古歌を引きふまえる箇所を包みこむ形で、ゆるやかに七音句五音句の表現が配されているものと見受けられる。このような観点に立つかぎり、流布本にくらべ異本のほうがより洗練された本文を有つもののように思われる。

四、「これはこの」――かしこまりの発語

さて、文頭に位置する「これはこの」という五文字はこの形にまとまることで、あらたまって事柄を説き起こしたり話題を切り出そうとしたりする発語となろう。「これやこの」あるいは「これぞこの」といった歌句の類型が思い浮かべられるのである。

ⓐ此也是能　大和にしては　我が恋ふる　紀路にありといふ　名に負ふ背の山　〔万葉集巻第一・三五、阿閇皇女〕

ⓑ巨礼也己能　名に負ふ鳴門の　渦潮に　玉藻刈るとふ　海人をとめども　〔万葉集巻第十五・三六三八、田辺秋庭〕

ⓒこれやこのゆくもかへるも別れつつ知るも知らぬもあふさかの関　〔後撰和歌集巻第十五・雑一・一〇八九、蟬丸〕

疑問の係助詞「や」を用いることで、詠歌主体が自らへの問いかけの意をも含めながら他への共感を求めようと詠嘆する態度をあらわしたこれら三例。万葉集のⓐ・ⓑ両例に用いられた「名に負ふ」という言い回しが証し立てるように、「（紀路の）背の山」や「（鳴門の）海人をとめども」を実際目のあたりにして「これやこの」と指呼している体である。こうした言い回しは持たぬものの「逢坂の関」を詠みこんだⓒも、やはり同趣の一首にちがいない。「これやこの」とは「《かねて聞いていたものを眼前にして、感嘆する時にいう》[8]」語だと的確に説かれている。

ⓓ……故事に　云ひ語り来る　澄江の　淵に釣せし　皇の民　浦島子が　天女に　釣られ来て　紫の　雲泛引て　片時に　将て飛往て　是此　常世之国と　語らひて　七日経しから　限無く命有りしは　此嶋にこそ　有けらし　……

〔続日本後紀歌謡・四、巻第十九・仁明天皇・嘉祥二年（八四九）三月二十六日条、興福寺大法師等天皇四十賀奉献長歌〕

ⓔおほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの

〔伊勢物語八十八段／古今和歌集巻第十七・雑歌上・八七九、業平朝臣／古今和歌六帖第一・天・ざふのつき・三三九〕

ついで掲げたⓓ・ⓔの二例は「これぞこの」を用いたもの。指示強調の係助詞「ぞ（そ）」を用いることでこれらは、「や」を用いる場合に比べていわば措定しようとする詠歌主体のより強い気持をあらわしたものと解せられるだろう。

山なかに、枝もはもなきくちなしの、たゝひとつふたつなれるを

ⓕこれはこのみゝなし山のくちなしか　いふかひなくにみもなりにけり〔書陵部蔵本小馬命婦集・四（私家集大成・中古Ⅰ・91）〕

これらに対して、係助詞「は」を用いたⓕは、上の句において「これは、耳成山つまり『耳無し』の山に成る梔子つまり『口無し』か」とおどけて問うた謎を、下の句において自解するという結構をもつ。詞書に示された「山中に、枝も葉もなき梔子の、ただ一つ二つ」実の成っている様子を、耳も無く口も無く「いふ効（も）無く」なったの「に実も成」ったのだなあ、と感嘆しながら、「いふ効無く」なってしまった「身」のありさまにもなぞらえ説いたものと解釈される。さらに「これはこの」と切り出されたのは、

ⓖみみなしの山のくちなし得てしがな思ひの色のした染めにせむ

〔古今和歌集巻第十九・雑体・誹諧歌・一〇二六、「題しらず　よみ人しらず」〕

という誹諧歌の存在をも意識した措辞なのであろう。このようにして、同音に基づく「（梔子の）実」と「（人の）身」の縁語のほか、「いふかひなく」の「かひ」に「山」と縁語をなす「峡」とともに「法螺」をも言いかけて、「成り」を意味する「なり」に「鳴り」の意をも響かせているのにちがいない。「耳」と「口」の存在がこれを支えるであろう。

表出態度の濃淡のちがいこそ認められるものの、ともに他への指向をにじませる「や」「ぞ」に対して、「は」の場合そうした姿勢は一見してあらわでなく、ⓕにおいて他への指向を明示するのは、いうまでもなく終助詞「か」の働きによるものであろう。すなわち「これはこの……か」という句型が、自問を含めてやはり他への問いかけをあらわしていると考えるのである。

もっとも「以前から聞いていた事を現実の出来事によって強く肯定する語。」[9] だとまとめて説明される「これぞこの」と「これやこの」に比べれば、「これはこの」によって採りあげられる事柄は、広く知られた「名に負ふ」事物や一般に受け入れられているような事柄ではないように思う。つまり、話し手にとっても個別的で一回的な出来事をとくに採りあげ自解しようとするとき用いられるのが「これはこの」という発語であると考えられる。

五、「なるべし」という文末――自作への謙辞

ところで、曾丹集の詞書が流布本においても異本においても「なるべし」という推測の表現で結ばれていることを以て、この詞書自体が好忠自身の手によるのでなく「後人の補注」[10]であると解する向きがあった。他撰と考えられるこの集のあり方に符合する結果ともおぼしい。

尼、頭句を作り、幷せて大伴宿禰家持、尼に
　　誂へらえて末句を続ぎ、等しく和ふる歌一首

イ．佐保川の　水を堰き上げて　植ゑし田を〈尼作る〉
　　刈れる初飯は　独奈流倍思〈家持続ぐ〉
　　〔万葉集巻第八・秋雑歌・一六三五〕

ロ．わたしもりふねわたしをとよふこゑのゆかぬなるへしかちおともせぬ
　　このうた人丸集にありと
　　〔西本願寺本赤人集・三三三／書陵部本赤人集・二一四〕

　　津の守に侍ける人のもとにてよみ侍ける　　忠　見

ハ．難波潟しげりあへるは君が世にあしかるわざをせねばなるべし[11]
　　〔拾遺和歌集巻第九・雑下・五三八〕

尼の作る「頭句」に家持が「末句」をついで一首となした短連歌。渡し舟の来ぬことを嘆く牽牛を詠んだ歌。摂津守である知人の治世を賛嘆した一首。これら和歌に用いられた「なるべし」はいずれも、対象となる事物や人物のありようを詠歌主体が推しはかったものである。

ニ．……またこのすめらみことといてましてをかにのぼりてのたまはくこのくにのすかたはなほあきつのとなめせるかことくもあるかなとこれよりはしめてあきつしまのなありといへり　あきつはむしのなゝるへし
　　〔日本紀竟宴和歌上・延喜六年・三番左注〕

ホ．したてりひめはあめわかひこのめなりそのをふとうせたるときかなしふこゑそらにきこゆといへりまたからのふみにつるさわにないてこゑそらにきこゆといへりそれをつらねいへるなるへし
　　〔日本紀竟宴和歌上・延喜六年・二七番左注〕

また、詠歌内容について日本紀本文を和らげて引きながら語句の意義を補足説明しようとするこれら左注[12]にみえる例は、次にかかげる家集の詞書にみえる挿入句の用例などと軌を一にするであろう。

ヘ．をんないと心うきものから、あはれにおぼえければ
　　なみださへしぐれにそへてふるさとはもみぢのいろもこさぞまされる
　　とかきてねずみもちにつけてやりける、なが月ばかりのことなるべし、をとこもみてかぎりなくめでけり
　　〔西本願寺本伊勢集・二番詞書〕

ト．年など老い衰へて、心地のみ常に苦しくおぼえて悩ましきに、あはれなど言ふ、子といふ物ゆめに無きに、生親族なる人を子と言ひつけて頼むやうなるに、まことの心ざしも無けれど、ただならむよりはとて、言ひ触るることもあるに、奥の国にぞ下りにける。奥の国といふは、大隅薩摩なるべし。のぼりて聞きてかくいひやる
　　〔檜垣嫗集・五番詞書〕

チ．この翁、かくいひつつ、心やすくもえ物言はぬことを思ひ嘆くに、またあらはれたる人もあれば、それにもつつむなるべし、常

にもえ逢はで、からうして
つらかりし君にまさりて憂きものはおのが命の長きなりけり
つつむ人ある折にて、かへりことも無かりけり。
〔一条摂政御集・一八番詞書〕

いずれも、言表内容に対する書き手の注釈にあたる。これらが家集において「をんな」あるいは「翁」などと他称に基づく叙述の部分にみえることも、加えて注意されよう。物語における草子地と連続する叙法だからである。

リ．むかし、男、つれなかりける人のもとに、
言へばえに言はねば胸に騒がれて心ひとつに嘆くころかな
〔伊勢物語第三十四段〕

ヌ．このゐたる大人、……とて立ちてゆく。髪ゆるるかにいと長くめやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるは、この子の後見なるべし。
〔源氏物語・若紫〕

前者の、語り手が作中人物の詠歌内容を忖度する一文と、後者の、語り手が作中世界において垣間見する源氏と一体となって女房の素姓を推理する一文とは、推測のおよぶ対象と表現主体とが位置する象限に微妙なちがいが認められる。けれど、おおよそ「……は……なるべし」という文型に還元できる、以上のような例を見わたせば、対象のあり方から観察しうる実相を確たるものと認識しながらも断定するにまで至ることなくやや退いてやんわりと表わそうとした点が共通しているであろう。好忠集にみえる次のような和歌の用例も同じい。

きのえ
ル．たごの浦のまつり事人百敷のえらびに入りてなれるなるべし
〔伝為相筆本好忠集（源順百首）・五六一〕

いわゆる順百首中にみえるこの歌の場合、「曾丹後」などとも称されるごとく「丹後の浦のまつりごと人」として任官を得た「好忠への賞賛」[13]を詠んだものと解される。

しかしながら、「なるべし」という表現が他のありようでなく自らのそれに向けられた用例も、次のごとく散見されるのである。

（はるものおもひけるころ）
①しらたまをつゝむそてのみなかるゝは春はなみたのさえぬなるへし
〔西本願寺本伊勢集・一一四〕

（春ものおもふころ）
1a白玉をつゝむ袖のみなかるゝは春は涙のさえぬなるへし
〔島田良二氏蔵本伊勢集・一一六〕

月をみて、ひさしくあはぬ人のもとに、年のはてに
②としせめてきみかこひしくおほゆるはあはぬ月日のつもるなるへし
〔書陵部本道命阿闍利集・一三九〕

ひさしうあはぬ人のもとに、としのはてに
2'としせめて君かこひしくおほゆれはあはぬ月日のつもるなるへし
〔書陵部本道命阿闍利集・三〇八〕

自らの春愁を詠んだ伊勢の歌。「年の果てに」長らく無沙汰をしている相手に詠みやった道命の挨拶。どちらも忖度を要さぬはずの詠み手自身の心情を、「春」という季節や「月日の積もる」所為であると遠回しに表現する。だからこそかえって「なるべし」という措辞で結ばれた歌が、受け手にしんみりと訴える印象をもたらすのであろう。

ところで①の伊勢の作には、以下に示すような本文異同が見とめら

れる。

（春物おもひけるに）

1b 後しら玉をつつむ袖のみなかるゝは春は涙もさえぬなりけり

〔正保版本歌仙家集本伊勢集・一一三〕

人のもとにつかはしける　伊勢

1c 白玉をつつむ袖のみなかるるは春は涙もさえぬなりけり

〔後撰和歌集巻第一・春上・二〇〕

1d 白玉をつつむそでのみなかるるはるはなみだのさえぬなりけり

〔古今和歌六帖第五・服飾・たま・三一九一〕

西本願寺本などに「なるべし」と作る句末を、正保版本をはじめ「なりけり」と作っている。「後」という集付や異文注記を考え合わせるなら、1bは、後撰和歌集に収める形を照らし合わせた結果を示すものと解される。「涙も」という措辞の異同もそれを支えるだろう。[14] ただし勅撰集にそなわる「人のもとにつかはしける」という詞書は、家集の詞書の内容と厳密に一致するわけではない。撰集に際した編纂も考慮すべきではあるが、春愁として自嘆する趣と、当の「もの思ひ」を「人のもとにつかはし」知らせる場合とでは、詠出の態度にやはり差異が予想される。それが、「なるべし」と「なりけり」という歌末のちがいに現われているのではないか。「なりけり」と作るほうが受け手へ訴える力がより大きいであろう。

おなじ伊勢の、次にかかげる本文異同の例もいささか複雑な様相を呈してはいるが、ほぼ同工と見なしてよいのであろう。

なきなたちけるころ

③よとゝもにわかぬれきぬとなる物はわふるなみたのきするなるへし

〔西本願寺本伊勢集・一四三〕

なき事人のいひける比

3a よとゝもに我ぬれ衣となる物はこふる涙のきする成けり

〔島田良二氏蔵本伊勢集・一四一〕

なき事を人のいひしころ

3b よとともにわかれぬ衣となる物はわふる涙のきする成へし

〔正保版本歌仙家集本伊勢集・一四一〕

なき名たち侍けるころ　（よみ人しらず）

3c 世とともにわが濡れ衣となる物はわぶる涙のきするなりけり

〔後撰和歌集巻第十七・雑三・一二〇二〕

3d よとともにわがぬれぎぬとなるものはわぶるなみだのきするなるべし

〔古今和歌六帖第五・服飾・ぬれぎぬ・三三二四〕

後撰和歌集では「よみ人しらず」とされ、古今和歌六帖では作者名を明示しないけれど、おなじ一首と考えてよいだろう。《推量》をあらわす「なるべし」[15]と《気づき》をあらわすと説かれる「なりけり」とを比較するかぎり、その実相をとらえようとすべく表現主体から対象へと及ぼされる知覚作用と、表現主体にもたらされる対象の実相がおのずから立ちあらわれる認知作用と、両者それぞれの認識のベクトルはあたかも対照をなすと説くことができる。[16]「なるべし」より「なりけり」の訴求力が大きいという印象も、ここに由来するものと考えられよう。

④あきのゝのくさんらことに□
詞
くつゆは夜るなくんしのな
ミたなるへし

〔冷泉家時雨亭文庫蔵伝西行筆本曽丹集・五二オ・二〇五
（冷泉家時雨亭叢書第十五巻『平安私家集 二』）〕

4′ 詞花 秋のゝのくさむらことにをくつゆは
よるなくむしのなミたなりけり

〔宮内庁書陵部蔵伝冷泉為相筆本好忠集・二〇五
（笠間影印叢刊、五八ページ）〕

好忠集にみえるこのような本文異同の場合、[17] 後人の所為ではなくあるいは歌人自身による推敲の過程を想定しうるのかもしれないけれど、それはそれとして、いまは「なるべし」が「なりけり」と交代しうる点こそが重要なのである。「なりけり」という詠嘆の表現をとらぬ流布本本文は、推量の表現に作ることで一歩退いた表出態度を実現しているとおぼしい。

ここに、好忠集の詞書が大きく「これはこの……なるべし」のごとき文脈を形づくっていることを顧みるなら、それは、前節に引いた(f)の「これはこの……か」という句型とゆるやかに連続した叙述の層をなしていることに気づかされるだろう。終助詞「か」によって顕示される訴えかけに比べ、むしろ自他の区別をも包みこんで、おだやかな訴求をあらわすのが「なるべし」という表現なのではないか。謙辞と解される所以である。「これはこの……なるべし」という文章の結構は、この直後に掲げられる沓冠の歌々にかんして、あらかじめ詠み手自身が述べる序であることを示すものとしてふさわしいのである。[18]

六、「国常立の神代より」——和歌の起源と天地開闢伝承

文頭の「これはこの」につづく「あとこたちの」という異本系の句はこのままでは解しづらいけれど、連体助詞「の」を用いて「神代」に冠せられ修飾句となることを考慮すれば、古代の神名を示すものかと推察される。流布本系には「あめのしたの神夜（ママ）ゝり」（冷泉家時雨亭文庫蔵「曽丹集」一二六オ）のごとく作る箇所である。後代の古来風躰抄では「やまと歌の起こり、その来たれること遠いかな。ちはやぶる神代より始まりて……」などと説き始められるが、もとより「ちはやぶる」という枕詞であったとは考えにくい。俊頼髄脳に「おほよそ歌の起こり、古今の序、和歌の式に見えたり。」とふれられるような注説に耳を傾けて、「古今の序」に立ち返ってみよう。

古今和歌集仮名序では、和歌の本質をのべたあと、「歌の起こり」について次のように説き起こす——「この歌、あめつちのひらけはじまりける時よりいでにけり」。この一文に附された「あまの浮橋のしたにて、めがみ、をがみとなりたまへることをいへる歌なり。」というのは「イザナギ・イザナミ二神遘合神話を指示する古注」[19]である。

伊奘諾尊・伊奘冉尊、立於天浮橋之上、共計曰、底下豈無国歟、廼以天之瓊矛、指下而探之、是獲滄溟。其矛鋒滴瀝之潮、凝成一嶋。名之曰磤馭慮嶋。二神於是降居彼嶋、因欲共為夫婦、産生洲国。便以磤馭慮嶋、為国中之柱、而陽神左旋、陰神右旋。分巡国柱、同会一面。〔日本書紀巻第一・神代上・第四段正文
（新編日本古典文学全集本、二四～二六ページ。ただし訓注は省略した。）〕

神代紀本文を参照すれば、古注を施した注記者が、「天浮橋之上」から「磤馭慮嶋」に降り居たあと「共為二夫婦一」って「産二生洲国一」もうとするイザナキ・イザナミ「二神」をそれぞれ「陽神」「陰神」

とうけ述べていくこの一節を念頭に置いていたものと推察される。しかしながら、仮名序に述べられる「うた」の「いできにけ」る「あめつちのひらけはじまりける時」の神とは、神代紀によれば、イザナキ・イザナミ以前に相当するようなのである。

開闢之初、洲壌浮漂、譬猶游魚之浮水上也。于時天地之中生一物。状如葦牙、便化為神。号国常立尊。

〔日本書紀巻第一・神代上・第一段正文

（前掲書一八ページ。ただし訓注は省略した。）〕

自国常立尊、迄伊奘諾尊・伊奘冉尊、是謂神世七代者矣。

〔日本書紀巻第一・神代上・第四段正文（前掲書二四ページ）〕

すなわち、天地「開闢之初」のときにまず現われたのは「国常立尊」なのであった。

ここでいささか時代が下るけれども、「現在知られている、まな序・かな序の注釈書では最も古いもので、平安時代後期の院政期の研究の実態をよく示している」[20]という陽明文庫本『序注』の注説はすこぶる興味深い。

国常立尊（クニトコタチノミコト）　陽神

日本紀云、アメツチヒラクルハシメ、ウカヒタヽヨヘルナカニ、ヒトツノモノアリ、カタチアシカヒノコトクニシテ、神トナレリ、コレヲクニトコタチノミコトヽマウス、神ノヨノハシメナリ、アシカヒハ、アシノツノクメルナルヘシ

従五位下大学頭藤原朝臣春海歌云、

アシカヒノナミノキサシモトホカラスアマノヒツキノハシメトオモヘハ

従四位下行大学頭兼文章博士備前守大江朝臣維時作歌云、

アメノシタヲサムルハシメムスヒヲキテヨロツヨマテニタエヌナリケリ

〔陽明文庫所蔵『序注』

（新日本古典文学大系『古今和歌集』三八〇ページ）〕

「国常立尊　陽神」とかかげ「日本紀云」として引証するこの記事は、のちに引く日本紀竟宴和歌の左注に一致するようであるが[21]、院政期における日本書紀のほかの注釈にも、

／神部也　葦牙是ハ世ノ始マリニ天地始テ開タル中ニアシノツノクミタルヤフナル物ノ有ケリソレカ神ニナタリケルヲ國ノ常立ノ尊ト申也常立尊是ハ世ノ始ノ始ノ神也

〔日本紀鈔上（中村啓信『信西日本紀鈔とその研究』高科書店、一一〇～一一一ページ）〕

などとあるように、内容をほぼ同じくして見える。「国常立尊」を「世ノ始リ始ノ神」とする理解は、『序注』の後半にも見えるごとく、少なくとも平安時代に行なわれた日本紀講書にまで溯ることができる。

得國常立尊（くにとこたちのみこと）　従五位下守大學頭藤原朝臣春海

葦牙廼那微能幾佐斯裳度保迦羅須阿麻都比津機能波志米度母弊波[22]あしかひのなみのきさしもとほからすあまつひつきのはしめともへは

あめつちひらくるはしめうかひたたよへるなかにひとつのものありかたちあしかひのことくにしてかみとなれりこれをくにとこたちのみことゝまうすかみのよのはしめなりあしかひはあしのつのくめるかたちなるへし

〔日本紀竟宴和歌上・延喜六年・四〕

得國常立尊

従四位下行大學頭兼文章博士備前守大江朝臣維時

安馬能芝多乎佐牟留波之女牟須毗於幾弖豫魯菟与萬羽珥多愛努那利氣理

あめのしたをさむるはしめむすひおきてよろつよまてにたえぬなりけり

〔日本紀竟宴和歌下・天慶六年・六八〕

延喜六年（九〇六）と天慶六年（九四三）の日本紀講書竟宴で披露された二首には「天つ日継ぎのはじめ」「天の下治むるはじめ」と詠ぜられている。このような理解を視野に収めるなら、好忠集の詞書に記された「あとこたちの神」とは、本来「国常立の神」とあるべき表現だと考えられるのではないか。[23] 実際、異本系に分類される「永仁三年書写本の転写本として、しかも、永仁三年時点に極く近い書写本」[24]としての伝存が確認されるという意義をもつ冷泉家時雨亭文庫蔵片仮名書き「曽祢好忠集」に、次のような本文が見とめられるのはすこぶる心強い。

コレハコノ才（クニ）トコタチノ神ヨヽリ人ノ心ノ
アサカ山カケサヘシルキ山ノ井ノトヨサキ
ノミフ子ヲヨセシナニハツニサキテニホヘル
ハナヽシニ才ホクノ人ノクチノハニ才ホ
メク事ヲシルスナルヘシ

〔曽祢好忠集・三二オ（『承空本私家集　下』〈冷泉家時雨亭叢書第七十一巻〉四四七ページ）〕

影印版によるかぎり、「ア」と判読しうる文字を一本の縦線で抹消したうえで、本文と同筆にて「クニ」と右傍に記していると見られる。おなじ永仁三年書写本の転写本系統に属する江戸時代中期ごろの書写にかかるという谷山茂博士蔵本では「これはこのくにとこたちの　神よゝり人の心のあさか山かけさへしるき山の井の　とよさきのみふねをよせしなにはつに……」[25]のごとく、訂正された右傍記が本文化されている。要するに「くにとこたちの神よゝり」と作る本文が、永仁三年（一二九五）すなわち鎌倉時代中期にまで溯ると考えられるのである。

七、「時待ちて御船を寄せし難波津に」

夫木和歌抄には「あさか山」という歌題のもと、作者名に「采女風」としるした「あさか山のことば」をなかに挟んで、以下の三首が並べ収められている。

あさか山、安積、陸奥

題不知、万八　　市原王

時まちておつるしぐれの雨やみてあさかの山かもみちしぬらん

同、万十一（ママ）　　采女風

あさか山かげさへみゆる山の井のあさき心をわがおもはなくに

人にたまはせける、万代　　仁和御製

あさかやまあさゐる雲の風をいたみたゆたふこころわれはもたらじ

〔夫木和歌抄巻第二十・雑部二・山・八六七九～八六八一〕

とりわけ興味深いのは、「万八」という出典注記の施された第一首目である。西本願寺本万葉集によればこの歌は、次のような書記様態

で収められる。

市原王歌一首

待時而（トキマチテ）　落鍾礼能（オツルシグレノ）　雨零収（アメヤミテ）　開朝香山之（アサカノヤマノ）　将黄変（ウツロヒヌラム）

〔万葉集巻第八・一五五一（新編国歌大観）〕

現在、この市原王の歌は「あさかの山」という地名を詠まぬ作として下の句が「……明けむ朝（あした）か　山のもみたむ」のごとくに改訂されているけれど、かつて、夫木和歌抄に収められた本文のように訓ぜられ受容されていたことは注意されてよい。平安時代後期には、

ときまちておつるしくれのあめやみてあさかの山はうつろひぬらん

〔類聚古集巻第三・秋部・黄葉・四〇一（大学堂書店版）〕

と訓読された本文も遺されている。初句に配された「時待ちて」とはここでは「時節を待ちうけるようにして」という意味で、この一首は「自然が季節に対応して折目正しく変化することに注目した歌」[26]である。

ところで、《何かを行なうのにふさわしい時宜を待つ》という意をあらわすこの「時待つ」という表現が、船出の潮待ちをいう場合にも用いられることには注目させられる。

天の川　八十瀬霧らへり　彦星の　時待（トキマツ）船は　今し漕ぐらし

〔万葉集巻第十・二〇五三〕

天の川　打橋渡せ　妹が家路　やまず通はむ　時不待（トキマタズトモ）友

〔万葉集巻第十・二〇五六〕

大船に　真楫しじ貫き　等吉麻都（トキマツ）と　われは思へど　月ぞ経にける

〔万葉集巻第十五・三六七九〕

とくに万葉集巻第十に収める二首が七夕をよんだ歌であることにも留意したい。後代の例になるけれど、

洞院摂政前左大臣

待七夕といふことを

あまのはらそらなるかはのわたしもり秋にはあへずみふねよせなん

〔万代和歌集巻第四・秋歌上・八〇一〕

という、天河の渡し守に「秋にはあへず御船（を）寄せ」て向こう岸へと渡してほしいと誂える作などが存することも慮れば、異本好忠集に綴られる「……あさか山　かげさへしるき　山の井の　とよさきのみふねをよせし　なにはつに……」という文脈において、「あさか山」と「なにはつ」という二つの関鑰語をつなぐ箇所に位置する「とよさきの」とは、あるいは「ときまちて」と作る本文であったと考えられはすまいか。万葉集巻第八に収める市原王の作を当代において訓じた一首を引きふまえた表現だと考えるのである。[27]

もっとも、前節末にひいた冷泉家時雨亭文庫蔵片仮名書き本に「トヨサキノ」と作るほか、資経筆本にも「とよさきの」と作るところを慮れば、[28]伝為相筆本の本文をにわかに誤りとすることにはやはり躊躇される。かな字母を優先しながら伝為相筆本の書記様態を翻刻すると、以下のごとくである。

心のあさ可山可けさへしるき山の井のとよ　」

佐き乃み布祢をよ勢しなに葉徒尓

さ支て耳本へ留者なゝし尓おほく能

〔笠間書院版『曽禰好忠集　宮内庁書陵部蔵　伝冷泉為相筆』一一九～一二〇ページ〕

鉤括弧で示したように、紙葉のオモテからウラにかわる箇所である。字形の類似から「支（き）」の草体が「よ」と混同されうることは、

引用箇所の最終行に記された「支（き）」からもうかがえる。[29] カタカナであったかもしれぬことを慮れば、「吉（キ）」を「吉（よ）」と誤る場合もあろうか。また、「佐（さ）」から直接に「ま」へと転訛することは考えにくいけれども、「さ」と「万（ま）」とのあいだなら容易に誤写を想定しうるだろう。伝為相筆本の百首歌の序には、

……あしたにハ佐（万）とにさゑ（盈）つるとりのこゑニおとろき……

〔同右書、一〇三ページ〕

のごとく、「佐（さ）」の右に「万（ま）」と傍記した箇所が見とめられる。これらに加えて、「地（ち）」あるいは「チ」が「起（き）」あるいは「キ」と混同されたり、「轉（て）」あるいは「天」が「能（の）」あるいは「乃」へ転訛したりするといった蓋然性も考慮のうちに入れてよかろうか。概してこの写本には、さまざまの書き入れが散見するのである。[30]

難波津に　御船泊（は）てぬと　聞こえ来ば　紐解き放けて　立ち走（ばし）りせむ

〔万葉集巻第五・八九六、山上憶良〕

なにはつにみふねとまりぬときこえこはひもときさけてたちはしりせん

〔類聚古集巻第十二・餞別部・遣唐使・八九〕

ここに憶良作のこのような例をも顧みれば、「時待ちて　御船を寄せし　難波津に」とは、船出にふさわしい潮時を待って御船を難波津に寄せて碇泊したことを述べる句として理解できるだろう。そうして「みかねことよせし」と作る流布本系本文のほうが却って、「みふねをよせし」という原形から崩れたものだと推測しうるのではないか。

【異　本】みふね　を　よせしなにはつ

⇔　⇔

【流布本】み　可　ね　こと　よせしなにはつ

といった本文転訛の過程が想定されよう。字形の類似から、「ふ」を「可」の草体に、「を」を「こと」二文字の連綿に、それぞれ読み写し誤ったものと考えるのである。

ちなみに、このように考えてもなお腑に落ちないのは、「あさか山影さへしるき　山の井の」と「時待ちて　御船を寄せし　難波津に」という叙述がなめらかに連続せぬ点であろう。「山の井の　時待ちて」という本文のままで「亥の時」の意をも兼ねてあらわすものだと解そうとしても、その文意は明らかでない。むしろ前後の五音句のあいだに位置するはずの七音句が脱落したものと想定したくなるのだけれど、充当しうる七音句を考えることは目下のところ論証の域を超えてしまうであろう。[31] いまは待考とするほかない。

おわりに——本稿の結論

以上のような想定が認められるとすれば、これまで好忠集の「あさか山なにはつ」の沓冠をみちびく詞書だと解釈されてきた本文は、五音句七音句がほぼ完備するところから、むしろ一首の長歌に仕立てられた序として把握できるようになる。好忠集前半に収められる三百六十首和歌いわゆる毎月集において、春夏秋冬の歌々をみちびく序としての長歌（と反歌）がそれぞれ四季ごとに配されていたように、この沓冠にも、序としての長歌が配されていたとしても不思議はないであろう。流布本にくらべ異本が洗練されているというのは、この謂いで

あった。

好忠集には、毎月集の夏の歌のうちに「あさか山」の歌に想を得たかと考えられる作を収めている。いま流布本系の天理図書館本を対校しつつ異本系の宮内庁書陵部本によって掲げると、

みくさおひしあさかのいはゐ夏なれはたもともひちてむすひあえぬかも　（異本系　九七）

下の句には「袖ひちてむすびし水の……」ならびに「むすぶ手のしづくに濁る山の井の……」と詠んだ紀貫之の著名な二首も踏まえられていよう。一方、「難波津の歌」をふまえた好忠の作には、次のような歌々がある。やはり異本系を底本として、流布本系の冷泉家時雨亭文庫蔵伝西行筆本を適宜対校しつつ掲げてみよう。

すまのあまもいまははるへとしりぬらしいつくともなくなへてかすめり　（異本系　一四）

あらをたのこそのふるあのふるよもきいまははるへとひこはえにけり　（異本系　五一）

きのふまてふゆこもれりしくらふ山けさハはるへとみねもさやけみ　（異本系三六九）

これまで述べ来たったところを踏まえて、異本好忠集の「あさか山なにはつ」の沓冠をみちびく文章にかんして、本文の復原私案とその解釈としての現代語訳を示せば、以下のとおりである。

【復原私案】※対句構成を明示すべく、字間をあけ改行を施した。

これはこの　国常立の　神代より
人の心の　あさか山
影さへしるき　山の井の［……］
時待ちて　御船を寄せし　難波津に
咲きて匂へる　花無しに
多くの人の　口の端に
おぼめく言を　記すなるべし

【現代語訳】※文意を円滑にすべく、丸括弧内に表現を補なった。

これはこの、（「やまとうた」の起こりをさかのぼれば到ることができるという天地開闢の初めの時の）**国常立尊の神の御代より**、（詠作する）**人の心の浅はかさ**（つまり我が浅慮）**を象徴する「浅い」という名をもつ「あさか山」の**（ことばに歌われるように、水面に映った我が浅慮の）**影までもがはっきりと見える山の井の**、［……］**潮時を待って御船を寄せた「難波津」**（の歌にうたわれるよう）**に**、（いまは春になったと告げるべく）**咲いて香ぐわしい**（はずの木の）**花も無いままに**、（すなわち愛でるべき取柄も無いのに、と）**多くの人の口の端にいぶかしく**（思われ）**上せられる**（ような、つたない我が）**歌々を、記すもののようである。**

要するに、おおよそ一首の長歌のごとき体裁をとりながら、古今和歌集仮名序において「歌の父母のやうに」評せられる「あさか山難波津」の二歌にあやかって、その二歌に用いられた歌詞を和歌の頭尾の一文字それぞれに据えながら三十一首に配し詠じた沓冠の出来を、好忠自身が謙退の意をこめて述べようとした序文だと理解するのである。古代の文献に接しようとするとき、文意の疎通を重んじようとする校定の態度がかえって本文をみだりに改変したり古体を損なったりする結果を招くために、むしろ〝不合理ゆえに吾信ず〟という立場を堅持

しようとする態度が大切なことは十分に承知している。しかしその一方で、伝写本の書記様態をも含めた個別の事例ごとに本文のありようを吟味することも肝要であると思う。注釈という作業のもつ意味が、そこにあると考えるからである。

かつて松田博士が「好忠集の流布本・異本を通じ、鎌倉期書写の現存古鈔本は僅か二本に過ぎず」と示されたような状況は、その書写年代が平安時代末期にまで溯りうる伝西行筆本の出現をはじめとして、冷泉家時雨亭文庫に襲蔵せられる資経本や承空本など貴重な伝本が紹介されている現在、飛躍的に整って新たな段階を迎えている。しかしながら、こうした「現存古鈔本」においてさえ伝写せられた本文のうちに尠なからぬ傷があることは、おのおのの伝本に注記されたさまざまな書き入れの存在が物語るところである。古代から中世へと連続する一方で、断続する一様相も察知されるのである。[32]

かくして、少なくとも好忠集の「あさか山なにはつ」の沓冠歌をみちびく文章を理会しようとするとき、流布本系のそれよりもむしろ異本系のほうがあるべき本文の姿をとどめ伝えていると考える次第である。[33]

—平成二十一年霜降—

注

（1）平成二十年五月二十二日、甲賀市教育委員会発表。「毎日新聞」平成二十年五月二十三日付朝刊による。なお、この木簡自体にかんする情報の正確な記録と諸氏によって示された見解の整理を兼ねそなえた栄原永遠男「歌木簡その後—あさかやま木簡出現の経緯とその後—」（萬葉語学文学研究会編『萬葉語文研究』第5集、和泉書院、二〇〇九年十月）がある。

（2）栄原永遠男博士の提唱せられるこの「歌木簡」発見の意義にかんする簡明な速報として、村田正博「『万葉集』支えた基盤の歌世界うかがわせる大きな意義」（『毎日新聞』平成二十年六月五日付朝刊）がある。単著としてはまた、犬飼　隆『木簡から探る和歌の起源　「難波津の歌」がうたわれ書かれた時代』（笠間書院、二〇〇八年九月）もそなわる。

（3）序をふくめこの家集の意義について、はやく堀部正二「千顕集（ママ）について」（『中世日本文学の書誌学的研究』臨川書店、昭和六十三年六月復刻版［全國書房、昭和二十三年六月初版］所収）がそなわる。

（4）枕草子「清涼殿の丑寅の隅の」の段や「集は」の段、また、源氏物語桐壺や夕顔・若紫などの巻々の記述に明らかである。

（5）神作光一・島田良二著『曽禰好忠集全釈』（笠間書院、昭和五十年十一月）四一八ページ【評】。

（6）『中古歌仙集㈠』〈和歌文学大系54〉（明治書院、平成十六年十月）に収める松本真奈美校注「曾禰好忠集」も、異本系である宮内庁書陵部本は校合本として用いながら、流布本系の天理図書館本を底本とする。そのような判断を下したことについて、松本氏は次のように述べておられる。

伝為相筆本は、古態を保ち、平安期に流布していた系統と思われるふしがあり、好忠自身の推敲の結果を思わせる本文を有している例があるなどの特徴がある。しかしその一方で、

誤写と思しき難解な箇所、注釈書の底本として用いるにはあまりに意味不明な本文も散見する。それゆえ、天理図書館蔵本が完本として最古の写本であること、親本が真観本と明示されていること、現存本の大部分がこれと同じ形態を有すること、後述のように現存最古の伝本である冷泉家本と近い本文であることなどを重視し、本注釈の底本には天理図書館蔵本を用いることとした。

〔和歌文学大系『中古歌仙集㈠』三一三ページ「解説」〕

（7）日本古典文学大系本の刊行以後、本文にかぎっても、次のように資料がそろっている。

【翻刻】

『曽禰好忠全集』上・下〈古典文庫〉　昭和四十年十月・昭和四十一年二月

『私家集大成』第一巻・中古Ⅰ　「105好忠Ⅰ」「106好忠Ⅱ」「107好忠Ⅲ」、明治書院、昭和四十八年十一月

『新編国歌大観』第三巻・私家集編Ⅰ「58好忠」、角川書店、昭和六十年五月

【影印複製】

『尚書禅門本〔複製〕曽禰好忠集　伝為氏筆』〈古典文庫〉　昭和四十年十一月

『曽禰好忠集　宮内庁書陵部蔵　伝冷泉為相筆本』笠間書院、昭和四十七年四月

『平安諸家集』〈天理図書館善本叢書和書之部第四巻〉八木書店、昭和四十七年五月

『曽禰好忠集　曼殊院蔵』〈京都大学国語国文資料叢書三十四〉臨川書店、昭和五十七年十一月

『平安私家集二』〈冷泉家時雨亭叢書第十五巻〉朝日新聞社、一九九四年六月

『資経本私家集三』〈冷泉家時雨亭叢書第六十七巻〉朝日新聞社、二〇〇三年十二月

『承空本私家集下』〈冷泉家時雨亭叢書第七十一巻〉朝日新聞社、二〇〇七年六月

（8）『岩波古語辞典　補訂版』五三八ページ。

（9）『日本国語大辞典　第二版』第五巻、一一三二ページ、頭注一。

（10）日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』一〇四ページ、頭注一。

（11）片桐洋一『拾遺和歌集の研究　校本篇　傳本研究篇』（大学堂書店、昭和四十五年十二月）によれば、藤原定家書写本の系統でない異本第一および第二系統では、歌末を「なりけり」と作るごとくである。

（12）西宮一民「日本紀竟宴和歌の左注」（『日本上代の文章と表記』風間書房、昭和四十五年二月、所収）は、竟宴和歌にひらかな書きの和歌の訓み下しをふくむ左注を附した人物としてはやく院政期の歌学者藤原顕輔を推定しようとした彌富破摩雄「日本紀竟宴和歌の研究（七）・（八）」（『國學院雑誌』第三十六巻第十號・第十一號、昭和五年十月號・十一月號）に賛同しながら、仮名遣いをはじめとする日本書紀訓読史研究の立場からその推定説を補強し、和歌の訓み下しをふくむ左注の作者を和歌の詠作者とは別人

である編纂者と考える根拠の一つとして、やはり「なるべし」という叙法に注目せられた。後述するようにこれは、古今集仮名序に典型として見えるような言い回しでもあって、例えば「みたまのふゆはまつりするなゝるへし」と注する竟宴和歌の左注と「暇無みかひなき身さへいそぐかなみたまの冬とむべも言ひけり」と詠んだ曾丹の作歌とのかかわりなども、あらためて検討を要するであろう。注22をも参照。

(13) 和歌文学大系『中古歌仙集㈠』一〇〇～一〇一ページ脚注。

(14)『後撰和歌集総索引』（大阪女子大学、昭和四十年十二月）によれば、定家書写本の系統に対立する異本系統に分類される二荒山本および片仮名本では、下の句を「はるはなみたのさえぬなるへし」「ハルハナミタノサエヌナルヘシ」（傍線引用者）のごとく作っている。

(15) なお、複合辞化している可能性の高いナルベシが一体となって《推量》をあらわすと把握し、「ベシ単独の意味として残るのは、非《推量》である可能性が高い」ものと説く高山善行「ベシの多義性をめぐって」（『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房〈ひつじ研究叢書（言語編）第25巻〉二〇〇二年二月）を参照。

(16) すでに引用した源氏物語若紫の一場面につづく叙述が、「なるべし」と「なりけり」のちがいの典型を示すものと認められよう。源氏が「若草」の少女を垣間見する場面である。

このゐたる大人、……とて立ちてゆく。髪ゆるるかにいと長くめやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるは、この子の後見なるべし。尼君、……とて、「こちや」と言へば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

〔源氏物語・若紫〕

傍線を施した箇所は、作中人物の視線に一体化した語り手による叙述として対照され配されているものと解せられる。

(17) 樋口芳麻呂氏が「流布本系に属する」と判断せられた上で「資経本は異本系の二首を含み持ち、流布本系の本文を主としながら、時に異本系の本文になって」いると解かれる（冷泉家時雨亭叢書第六十七巻『資経本私家集 三』「解題」一九～二〇ページ）、藤原資経の書写にかかる曽禰好忠集では、第五句を次のごとく作っている。

あき乃のゝくさむらことにをくつゆハ
よるなくむしのなミたなるらし

〔資経筆本曽禰好忠集・二四ウ
（冷泉家時雨亭叢書第六十七巻『資経本私家集 三』）〕

さらに、いわゆる異本系のうち永仁三年写の転写本に属すると考えられる冷泉家時雨亭文庫蔵片仮名書き本曽禰好忠集にも「ナルラシ」と作っている。

アキノゝノクサムラコトニヲクツユハ
ヨルナクムシノナミタナルラシ

〔冷泉家時雨亭文庫蔵片仮名書き本曽禰好忠集・一八オ

（冷泉家時雨亭叢書第七十一巻『承空本私家集 下』）

本稿に採りあげている沓冠歌の本文も、資経本は明らかに異本系の形をもっている（四九オ参照）。ここに、流布本と異本とに二大別する従来の伝本分類を改めて、「鎌倉時代の古写本三本を主要伝本と考えて、／第一類　天理本／第二類　資経本／第三類　書陵部本／と分類するのが妥当かもしれない。」（冷泉家時雨亭叢書第六十七巻『資経本私家集 三』「解題」二〇ページ）と述べられた樋口氏の提言や、また別途、残欠本ながら『曾丹集』として現存最古資料と目される時雨亭文庫蔵伝西行筆本の本文異同状況を調査せられた上、「時雨亭文庫蔵本のために新たに一系統を立てて考えてみることも場合によっては必要であろう」とされた田中登氏の提言（冷泉家時雨亭叢書第十五巻『平安私家集 二』「解題」一一～一三ページ）に思いを致す。なお、後代の詞華和歌集には、次のごとく「なるべし」と作る本文で収めている。

題不知　　一本曾禰なし義イ　曽禰好忠

秋の野の草むらことにをく露はよるなくむしの涙なるへし

（詞華和歌集巻第三・秋・一一六（笠間叢書16））

(18) 荒木　浩「〈なるべし〉という表現のこと―〈自記〉と〈他記〉とのあわい―」（『待兼山論叢』第二十八号　文学篇、大阪大学文学部、一九九四年十二月）は漢文脈をも視野に収めて、以下のごとく端的に述べる。

序文の如き、献呈者を持ち、ある種のかしこまりの態度でもって、「客観的に」かつ謙退をこめて「婉曲」に自らの著述行為を語る文体基調を、和文に移しかえる時、〈なるべし〉という文末は、まさに相応しかったはずなのである。

（一四ページ）

(19) 新日本古典文学大系『古今和歌集』五ページ、脚注六。

(20) 新日本古典文学大系『古今和歌集』四八一ページ。

(21) 注12参照。

(22) 「葦牙の波のきざしも遠からず」という上の句の詠みぶりは他方、「あしかびは、あしのつのぐめるかたちなるべし」という竟宴和歌の左注を介して、好忠の次のような作歌を想い起こさせる。

三島江につのぐみわたる蘆の根の一よのほどに春めきにけり

〔好忠集・三／後拾遺和歌抄第一・春上・四二／新撰朗詠集上・春・早春・一一〕

のち生ひのつのぐむ蘆のほどもなき憂き世中は住み憂かりけり

〔好忠集・四三五／夫木和歌抄巻廿八・雑歌十・一三四二一〕

好忠の薬籠に日本紀にかんする知識の入っていたことが推察される。前者の「つのぐみわたる」を「好忠が新たに用いた語か。」（川村晃生校注『後拾遺和歌集』和泉古典叢書3、三五八ページ補注42二）と評する向きもあるが、むしろ平安中期における日本紀受容のありようを顧慮する余地があるように思う。こうして、当代に共有された知識の一環をめぐる問題として把握しなおすべきこととなるであろう。なお、通説に初撰本の撰者として真観（葉室光俊）が想定されている万代和歌集にこの詠歌をはじめとする三首が日本紀竟宴和歌から採録されている（万代和歌集巻第七・神祇歌・一五四〇～一五四二）ことも興味深い。注31をも参

照のこと。

(23) たとえば、伝写の過程に生じうる本文転訛のありようを思いめぐらせば、以下のごとくであろうか。

【現存写本】←誤写←【書記想定】

あ ……（安）…… 國

あ ……（愛）…… 求二（「くに」をあらわす連綿体）

ア ……（足）…… ロニ（「クニ」をあらわす二文字）

ちなみに「あとこたちの神」という文字つづきのみを慮って「あめとこたちの神」すなわち「天常立神」と解する蓋然性も、あるいはほんのわずかながら残っているのだろうか。なお流布本系のごとく「あめのしたの神（代より）」と作る場合でも、いささか漠然としてはいるがそのままで「国常立神」を示そうとする表現だと考えられるようにも思われる。

(24) 新藤協三氏執筆「解題」（『承空本私家集　下』）四三ページ。谷山茂博士蔵本がこの片仮名本の「直接の転写本と想定」される可能性がきわめて高いことについても言及せられている。

(25) 神作光一編『曽禰好忠全集　下』古典文庫、二六二ページ参照。句切りの空白は翻刻文のまま。谷山博士蔵本ではこの文章を「＊原本字下リナシ」に書きしるす様態をもっていることもすこぶる興味深い。注32を参照のこと。

(26) 新潮日本古典集成『万葉集　二』三三〇ページ頭注。

(27)「あさか山」と「なにはつ」という二語を結びつける背景の一つとして、万葉集以来よまれている摂津国の歌枕「住吉の浅鹿の浦」も遠くかかわっているかもしれない。ちなみに「浅鹿」という書記は、千穎集序にしるす「浅鹿山之什」も同じい。

（弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首）

夕さらば　潮満ち来なむ　住吉乃浅鹿乃浦尓　玉藻刈りてな

〔万葉集巻第二・一二一〕

ゆふされはしほみちきなむすみよしのあさかのうらにたまもかりてな

〔類聚古集巻第七・草部・玉藻・一〇八〕

あさかのうら、浅鹿、摂津又常陸

題不知、六帖　　読人不知

ひたちなるあさかの浦のたまもこそひけばたえすれわれはたえせじ

同、万代　　惟範朝臣

しほかなふあさかのうらのおひかぜにかぢもとりあへずいづるふな人

建長八年百首歌合　　伊嗣朝臣

すみよしのあさかのうらのいそまくらしほみちこずはここにあかさむ

題不知、万二　　弓削皇子

ゆふさればしほみちきなんすみよしのあさかのうらにたまもかりてな

〔夫木和歌抄巻第二十五・雑部七・浦・一一六一二～一一六一五〕

第七節冒頭にひいた「あさか山」を詠ずる仁和御製に「たゆたふ」という語が用いられていることも、示唆深い。「動揺して安定しない」意をあらわすこの語は、「船や雲浪の漂い」に用いら

れるからである（『時代別国語大辞典　上代編』四四九ページ）。

（28）伝為相筆本とおなじ本文を有する冷泉家時雨亭文庫蔵資経筆本を、翻刻してかかげる。

これは古乃あとこたちの神よゝり人
乃心のあさか山かけさへ志るき山の井
のとよさき乃ミふねをよせしな尓
ハ川に佐きて尓本へるハ那なし尓
おほくの人のくちのは尓おほめく事
を志るすな□へし
あ里へしとなけく物からかきりあれハ　　」
なミた尓うきてよ越もふるか那

〔資経筆本曽禰好忠集・四九オ～四九ウ
『資経本私家集　三』三一五～三一六ページ〕

（29）『後撰和歌集総索引』によれば、第五節に引いた3c「世とともにわが濡れ衣と」の歌の下の句を、堀河本のみ「わふる涙のよするなりけり」（堀河本巻十七・一一九七）と作る。「濡れ衣」との縁語をなすことを顧みれば当然「きする（着する）」と作るべき箇所であろう。

（30）家集の冒頭に記された一番の長歌には、次のように傍記された箇所がある。

……な川乃よ可勢のすゝしきふゆのあ可つき満て志る勢ることとはをこなし（れ）と……

〔笠間書院版『曽禰好忠集　宮内庁書陵部蔵　伝冷泉為相筆』二ページ〕

「……夏の夜　風の涼しき　冬の暁まで　記せることは　をこなれど……」と解される文脈で「し」の右傍に「れ」と記されたこの箇所を熟視してみると、「し」が「レ」を読み誤った文字のように思いめぐらされもする。この写本を作成するために用いられた書き本が、冷泉家時雨亭文庫蔵片仮名書き本のごとき写本であったことが想像されようか。書陵部本には書き洩らした和歌をカタカナで行間に補ない入れた箇所がある（笠間影印叢刊、一三五ページ）。

（31）貫之の作か躬恒の作かどちらとも決めかねるのだが、「山の井」を詠んだ次のような歌を参照するなら、

みちのたより　　つらゆき
すぎがてに人はとまれど山の井のたよりときけばあさくぞありける

〔古今和歌六帖第五・雑思・二八四九／
西本願寺本躬恒集・一三六、
詞書「人の家のほとりの山の井」〕

「（山の井の）たよりにとまる（時待ちて）」といった七音句などが考えられるだろうか。

山の井のみなと、未国

文永二年七月白川殿七百首　　光俊朝臣
山の井のみなとわかれてゆくふねのあかでも人にぬるる袖かな

〔夫木和歌抄巻第二十五・雑部七・一一九一七〕

あるいは後代の作になるけれど、このような、所在国は未詳ながら「山の井のみなと」という地名を詠みこんだ例が遺されている。この歌の頭尾に配された「山の井の」と「あかでも人にぬる

る袖かな」という句は、例の紀貫之の歌の下三句「山の井のあかでも人に別れぬるかな」を踏まえる。貫之の作は「あさか山」の歌と相並んで古今和歌六帖第二に「山の井」の歌題のもと収められてもいて、光俊は、その古今和歌六帖の歌題を中心として詠作した新撰和歌六帖にかかわった歌人の一人でもある。さらに天理図書館蔵伝二条為氏筆本好忠集の書写奥書によれば、この本の親本は、真観すなわち葉室光俊の所持していた写本であったことがわかる（橋本不美男「解題」〔天理図書館善本叢書和書之部第四巻『平安諸家集』〕二一ページ参照）。「時待ちて　御船を寄せ」るという文脈にひきつけるなら、

みちのべのゆききにむすぶ山の井のすまばやしばし心しづかに

〔新撰和歌六帖第二帖・山の井・五五三、九条三位入道知家〕

といった和歌などを参考に、「山の井の湊」の意に転じて、曾丹集の詞書に想定される脱落を補ないうる表現として「みなとにしばし」といった七音句など充てることもできようか。

(32) 好忠集の現存本冒頭に位置して毎月集の序にあたる一番の長歌の末尾には、流布本系になく、異本系にのみ見とめられる、句中に単独母音をふくむ二句「とおもふ心の　あるにぞあるらし」という本文がさらに附け加わってある。

ⓐ　……志る勢ること盤

於こなし登おやのつ気てし名にし於はゝ
なをよしたゝと人も見るかねとおもふ古
ろのあるにそ阿るらしよさのうらにおいの
なミか須〳〵へくるあまの志わさ登人も見よとそ

〔冷泉家時雨亭文庫蔵片仮名書き本曽禰好忠集・一ウ
（『承空本私家集　下』三八六ページ）〕

ⓑ　……志るせることハ

おこなしとおやの川けてし名にしおはゝ
なをよしたゝと人も見るかねとおもふこ
ろのあるとにそあるらし。
「よさのうらにおいのなミかす〳〵へくるあ万
の志わさと人も見よとそ

〔資経筆本曽禰好忠集・二オ
（『資経本私家集　三』二二一ページ）〕

ⓒ　……志る勢ることはをこ

なしとおやのつけてし名にし本はゝ
な越よしたゝと人毛み留か祢とおもふ心
乃あるにそあ留らし
よさのうら尓をいのな見かす〳〵へ川留
あまのしわ佐と人毛みよとそ

〔宮内庁書陵部蔵伝冷泉為相筆本好忠集
（笠間影印叢刊、二〜三ページ）〕

現在便宜上歌番号を附して長歌の一番と和歌の二番とに分かたれる二首を区別することなく、おなじ字高で続けて書きしるすⓐ片仮名書き本（とはいいながら一丁ウラのこの箇所まではカタカナでなく、もっぱらひらかなを用いた一見してただたどしい書記をとる）。改行された和歌の文頭と直前の長歌の末尾とを補入記号で結びつけ、おなじ字高で書きしるすⓑ資経筆本。一番の長歌

の字高をつづく二番の和歌より二字分ほど斉しく下げて、いわば詞書と歌のごとくその内容を分別して書きしるすⓒ伝為相筆本。これらがどのような用途のために作製された写本なのか、その全体像を顧慮する必要もあるけれど、いまこうして掲げた順序のかぎりにおいて三本相互の書記様態から相察される関係は、すこぶる興味深いのである。なぜなら、宮内庁書陵部本をとおして「異本の本文は、平安時代さながらの好忠の歌の古体を伝えているように思われる節がある」また「素朴な性質を有する」と感受されていた従来の印象は、あらたにこれら三者の書記様態を比べ合わせてみると、ⓒの書陵部本においてさえ、現在の私たちに親しいレイアウト、歌集としての体裁へとすでに加工が施されている事実をうかがわせるものと推察されるからである。が、それはそれとして、一番の長歌に「あるらし」という文末をもつこうした表現を伴なった異本系の本文は、本稿に採りあげた沓冠歌の序文のあり方と軌を一にするもののように思われる。

(33)「あさか山難波津」の沓冠歌の第十八首目は、伝西行筆曽丹集（一三二オ）に、

あれはいとふなけれはしのふ
世中ニわかミ日とつはす身わ日ぬ
やい

〔冷泉家時雨亭叢書第十五巻『平安私家集 二』〕

と作るように、その歌末は前後の配列からも「やい」とあるべき箇所であるが、注32で引いた異本系の三本においてさえすでに次のごとく作っている。

ⓐアレハイトフナケレハシノフヨノ中ニ
ワカ身ヒトツハスミワヒヌヤハ
〔片仮名書き本曽禰好忠集・三三ウ〕

ⓑあれはいとふなけれは志のふよの中尓
わか身日とつハすミわひぬやは
〔資経筆本曽禰好忠集・五一オ〕

ⓒ（續後拾）あれハいと婦な氣れハしのふよのなか尓
我身日とつハありわひぬやも（い）（と）
〔伝冷泉為相筆好忠集・一二四ページ〕

「やい」と作る歌末をいぶかった所為かと臆測されるけれども、あるいは単に「い」を「ハ」と読み誤った結果なのかも知れない。